

第 100 回 オーストリアとプロイセン②

1 外交革命と七年戦争

- ・（ ）によって（ ）地方をプロイセンに奪われたオーストリアは、なりふり構わぬ外交政策をとった。



マリア=テレジア
23 歳でハプスブルク家を継ぎ、オーストリアを強国にするために努力した。恋愛結婚した夫フランツ1世とは生涯ラブな状態が続き、16 人の子供を出産した。ハプスブルク家の肝っ玉母さんである。

◆フランツ 1 世（在位 1745～1765 年）

◆（ ）（在位 1740～1780 年）

・マリア=テレジアは、啓蒙専制君主としてオーストリアの強化を図った。

・プロイセンからシュレジエン地方を取り戻すため、長年の宿敵である（ ）のルイ 15 世と突如同盟した。

※これを（ ）という。

→イギリスは海外植民地でフランスと対立しており、この戦争ではプロイセン側を支援した。

・1756 年、オーストリア・フランス・ロシアと、プロイセン・イギリスとの間で戦争が始まった。

※この戦争を（ ）という。

→同時にイギリスとフランスは、海外で植民地争奪戦を繰り返していた。



プロイセンのフリードリヒ大王

さすがのフリードリヒ大王も、七年戦争では自殺を覚悟したらしいが、最後にまさかの展開となった。これは「ブランデンブルクの奇跡」と呼ばれている。



ロシア皇帝ピョートル3世

ロシア皇帝だがドイツ生まれであり、フリードリヒ大王を崇拜していた。1762年に即位すると、突如オーストリアを裏切り撤退した。趣味は兵隊のおもちゃで遊ぶこと。知的障害があったとも言われる。



クライヴ

イギリス東インド会社の書記。1757 年、七年戦争に連動して、イギリスとフランスがインドの覇権をかけて戦ったブラッシーの戦いを、イギリス勝利に導いた。

・オーストリア側が優位に戦いを進めたが、途中でロシアが裏切ったためプロイセン側が優勢となり 1763 年に休戦した。

→結局シュレジエン地方は取り戻せなかった。



マリア=テレジアとその家族
一番左が夫で神聖ローマ皇帝のフランツ1世。マリア=テレジアの左に立つ年長の男の子が後のヨーゼフ2世。子供が生まれるたびに、同じ構図の絵に子供の絵を追加していった。

2 七年戦争後のオーストリア

- ・七年戦争後、オーストリアとフランスは、同盟をより強固なものにするために政略結婚を計画した。

→1770 年、マリア=テレジアの末娘（ ）と、フランスの王太子ルイ（後の ）を結婚させた。



ヨーゼフ2世
イケメンで人間性もよ
かったが、「一歩目よ
り先に二歩目が出る
男」と評された。

◆ () (在位 1765～1790 年) ※1765～1780 年は、母との共同統治

- ・マリア=テレジアの息子ヨーゼフ2世も啓蒙専制君主として近代化に努めた。

→ () による信教の自由、() による農民保護、ドイツ語の公用語化、税制改革など急進的な改革を行った。

→あまりに急激な改革のため反対も多く、成功しなかった。

- ・1772 年、ロシア皇帝のエカチェリーナ 2 世の誘いに乗り、プロイセンとともに（ ）を行った。



フランス王ルイ 15 世

ルイ 14 世のひ孫で、後を継いだ。しかし政治には関心がなく、愛人ポンパドゥール夫人の政治介入をまねいた。戦争と贅沢により、フランスの財政は破たん状態となった。



後のレイ 16 世

ルイ15世の王太子であった。いわゆるオタク的な性格で、自分の趣味に引きこもる傾向があった。いい人だとは思いますが、生まれる時代が悪すぎた…。



マリー=アントワネット

マリア=テレジアの末娘であり、非常にかわいがられていた。ルイ 16 世との結婚は、結局のところ彼女を不幸にしてしまった。

- ・オーストリアのザルツブルク出身の作曲家（ ）は、宮廷音楽家としてヨーゼフ2世のもとで多くの曲を作った。

18世紀中頃のヨーロッパ



モーツァルト

歴史上もっとも有名な音楽家のひとりだろう。わずか 35 年の生涯で、「アイネ＝クライネ＝ナハト＝ムジーク」、「フィガロの結婚」、「トルコ行進曲」など、名曲を数多く作った。



映画『アマデウス』

興味のある人は、アカデミー賞作品『アマデウス』を観てみよう。天才と変人は紙一重ということがよくわかる。とにかく笑い声が強烈である。

